
霧の島が呼んでいる

久遠 安樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の島が呼んでいる

【Nコード】

N4691V

【作者名】

久遠 安樹

【あらすじ】

父の転勤により、霧の島へ越してきた環菜。だが、どこかおかしい。錬金工場から立ち昇る煙により、空は覆われ、一切の陽光を遮断する。この島に越してから、母は毎日のように酒に入り浸るようになった。そして霧の島で噂される神隠し事件。環菜の妹、皇月までもが姿を消してしまう。サスペンスホラー、解禁！！

1・移住

海で泳いでいる子供が数人。浜辺には崩れかけた砂の城。渚とおどる持ち主のないビーチボール。夜でもないのにこの島が暗く見えるのは、どこからか排出される錬金工場から立ち昇る煙の所為だ。

先ほどまでは霧で何も見えなかったが、今でははっきりと島の全体が見える。汽笛を鳴らす船の甲板に立ち、迫りくる島をわたしは静かに見つめていた。今日から、この島で暮らす。両親は船の中で談笑していたし、妹はたぶんその辺を走り回っているだろう。

この大きな船にはわたし達家族と船の従業員しか乗っていない。霧の島はこんなにも人気のない田舎島なのかと、かなりがっかりした。

船の後方を振り返ったけれど、目の前には霧で霞んだ水平線が見えるだけだった。ああ、これじゃあもう泳いで東京には戻れない、なんて落胆した。

父の転勤でこの島に移住する事が決まったが、こんな小さな島でいったい何の仕事が出来るんだって思う。引越しに猛反対したわたしに父は「海が見える家だぞ」と笑顔で言っただけれど、潮風の匂いは好きじゃない。

妹は小学校でイジメに遭っていた。だからこの引越しは賛成だった。母は元アルコール中毒者で、東京の濁った空気ではなく、島の自然な空気を吸いたいと勿論、父について行くことを決めた。

その中でわたしはそれなりに中学では友達もいたし、結構充実した毎日を過ごし、東京も好きだったから、このわけも分からない霧の島に移住するのはかなり嫌だった。だけど、結局頷くしかない。まだ十四歳のわたしは大人たちの前では恐ろしいくらい、無力なのだ。

父の上司が「桐野くん。やっぱり転勤はナシだ。がっはははは！」と電話してきてくれたら、どんなに嬉しい事だろう。昨日一晩中、

最後の悪足掻きでそんな電話を待っていたが、当然の事ながらか
つてくる事はなかった。

「お姉ちゃん！島見えるー？」

聞き慣れた無邪気な声が、嫌いな潮風にあたるわたしの耳に届い
た。すぐに妹だと分かり、わたしは振り返って、甲板の入り口から
顔を出す妹に「さつきからずっと見えてるよ」と答えた。

「本当！？」

妹は駆けてきて、ツインテールを揺らしながらわたしの隣に並び、
船から身を乗り出して、名前通り濃い霧に包まれた島を見てはしゃ
いでいた。

わたしは今から地獄に向かっているような気分だが、東京でイジ
メに遭っていた妹にとっては霧の島が天国のように感じているのか
もしれない。たぶん父は娘がこんな状態になっているから、転勤を
決めたのかも、とわたしは少しだけ思った。

この島に近づくと、わたしの心の中で大きな恐怖と不安が、ま
るで風船を膨らませていくように膨張していた事は秘密だ。わたし
らしかめ、緊張なのかと思っていたが、今はつきりした。わたしは
この島が怖いのだ。霧に包まれたこの島から、もう逃げ出せな
いような気がして。

父はどこにでもいる普通のサラリーマンだ。一体、この小さな島
で何の仕事をするつもりなのだろう。

「どうしたの？お姉ちゃん」

霧が濃い。もう後ろを振り返っても、水平線なんか見えなくなっ
てしまった。おかしい。さつきまで見えていたはずなのに、霧の濃
い域に入ったのだろうか。海で泳いでいる子供が数人。浜辺には崩
れかけた砂の城。渚とおどる持ち主のないビーチボールも霧に消え
てしまった。

そのうち、目の前の妹も霧で掻き消されてしまいそうで怖かった。
存在を確かめるように妹の手をぎゅっと握り締めたわたしを、妹は
不思議そうな目でわたしを見上げていた。

2・島人

船から降りたわたし達家族は、船に乗せていた車で、これから住む家のもとへ移動しようとしたが、霧が深く、道に迷ってしまった。

「あれー？おかしいな……」

手書きの地図をぐるぐる回しながら父は困っていた。桐野家の大黒柱は何を勘違いしているのか、この陰気な島に不釣合いなアロハシャツ姿に星型のサングラス。もう四十手前の大の大人だというのに、とわたしは呆れた。

一方、母は霧の湿った空気の所為で煙草に火がうつらなくて苛々していた。ヘビースモーカーである母は、船でも三十本ほど吸っていて、灰皿には煙草の吸殻が山になっていた。実は煙草の煙が苦手なわたしは、だから甲板で嫌な潮風にあたっていたのだった。煙草の煙に包まれるより、潮風にあたる方が良いと判断して。

「臯月、おなかすいたー」

船で少し朝ご飯を食べただけで後は何も口にしていない臯月が拗ね始める。仕方ないことだと分かっているのに、父への不満や母の煙草でわたしは苛々していた。気がつかないうちに片足で貧乏揺すりをおこしていた。

「お母さんの鞆にパンが入ってるから。環菜、臯月に渡してあげて」

助手席に座る母からブランドの鞆を受け取り、わたしは苛々しながらメロンパンを取り出した。鞆を母に返し、メロンパンを一番後ろの席に座る臯月に手渡す。臯月はメロンパンにかじりつくくと大人しくなった。わたしは人知れず、ため息を吐いた。

「あ！島の人かな、あのおじいさん。ちょっと聞いてみよう」

父がそう言っ、おじいさんのもとへ車を走らせる。そのとき、ようやく母の煙草に火がつき、母は恍惚とした表情で煙草を吸い始めた。その様子を見つめ、わたしは将来、絶対こんな大人になりた

くないと思った。

父が車のウィンドウを開け、おじいさんに声をかける。白髪と霧が今にも同化してしまいそうだった。父はさすがにサングラスを外しておじいさんに手書きの地図を見せたが、おじいさんは口をかたく閉じたまま、父の顔を凝視していた。瞬きしない所為でおじいさんの目が赤く充血していく。その様子に異様を感じたのか、臯月がわたしの背中にしがみ付いてきた。

「あ、あの……?」

父がおずおずとそう尋ねるとおじいさんはやっとな口を開いた。

「お前さん達、ここに住むのかね?」

「え?あ、はい。よろし」

「悪い事は言わん。今すぐ帰りなさい」

「え……?」

「この島は霧の島。神が住んでおる。神はこの島から逃がしてはくれん。今ならまだ間に合うかもしれん。今すぐ引き返せ。そしてもう二度とこの島に立ち入ってはならん!」

異様な剣幕を纏い、大声を張り上げるおじいさんに母が不気味がつて父のアロハシャツを引っ張った。もう行こう、という合図を送っていたが、おじいさんはこちらが頷くまで説得をするらしく、車の開けた窓の部分に手を突っ込んだ。

「お前たち、このワシのように老いぼれになるつもりか。いいか、よく聞け。お前たちは近いうち、きつと不幸になる!ワシの忠告を聞かんからじゃ!」

なに、このおじいさん……。不幸になる、って冗談じゃないわよ……。

心の中でそう毒づいたわたしにおじいさんは肉食鳥のような眼差しを向けてきた。

「冗談なんかではないぞ。娘さん、あんたこの島で何を見る」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691v/>

霧の島が呼んでいる

2011年8月15日07時16分発行